

終戦期長野の山村疎開の諸相

——石川達三「暗い嘆きの谷」を読む——

神子島 健

I. 問題設定

「疎開」と聞いて何をイメージするだろうか。農村に放り込まれた都会っ子、24時間体制の集団行動ゆえのいじめ、空腹と食料の奪い合いなど、戦後に出て来た当事者の回想の多くには、疎開によって10歳前後の少年少女が直視せざるをえなかった人間の負の側面が語られることが多い。

後で詳しく述べるように資料として残りやすいのは学童集団疎開である。その多くは学校の同窓会あるいは当時の児童と受け入れ先地域の人々との戦後の交流会が編集する回想録など、当事者集団の手による記録が多い。もしくは市区町村で聞き取りをしたりすることもある。だから豊島区で作った資料に触れて、「むずかしいのは、まだ生存されている方も多し、公立の資料館ということもあって、一方的に非難するようなことは書けません。いきおい抽象的に書かざるを得ず、リアルさ切実さがでてこないという問題があります」(全国疎開学童連絡協議会(編)[1991: 47])と、ある疎開体験者が戦後46年の時点でなお述べていた。

体験者の高齢化による切迫感からか、全国疎開学童連絡協議会企画事業部(編)[2007]などこうした欠点を克服するような証言が最近出てきてはいるが、学童集団疎開に限定して考えても当事者ゆえの視角の限界はある。また、縁故疎開や工場疎開など、疎開の他の側面は尚更見えにくい。本稿では当事者から少し離れた観察者として作家の石川達三が書いた「暗い嘆きの谷」

という小説を通して、疎開地となった温泉郷の終戦前後の諸相を見ていく。

石川達三(1905-1985)は、「蒼氓」で第一回芥川賞(1935年)を受賞した。日中戦争の兵士を描いた「生きてゐる兵隊」(『中央公論』1938年3月号)の発売禁止などで知られる一方、徴用され海軍の報道班員となったり、文学報国会の実践部長なども務め、十五年戦争と関わりの深い作家の一人であった。

戦争末期、長野県芋井村(現在は長野市芋井地区)に石川は妻と三人の子どもを疎開させた。その体験を元に「暗い嘆きの谷」(『文学界』1949年3月~7月)という少し長めの短編を執筆している。1949年11月に単行本として出され、その際作者は「後書」をつけ、「この作品はかなり記録にちかいもので、殊更な粉飾は施さなかった」(石川[1957: 242])と書いている。ただし厳密なノン・フィクションではなく、登場人物の名前も変えてあるし、後で見ていくように設定の変更も存在する。あくまで小説である。

彼のデビュー当時から戦後にかけて文壇で重要な流れを作っていた「私小説」。その私小説に批判的で社会的な題材を扱った作品が石川には多い(松本[2002])。「蒼氓」と「生きてゐる兵隊」がともに典型的である。複数の人々をプロットに配置して、階層(階級)、ジェンダー、地域、世代などの差異による行動の違い、対立などでストーリーを組み立てるのである。「暗い嘆きの谷」も自分と家族の体験がベースにあるが、体験からは距離を取って描かれておりそ

の流れに位置づけられる。

戦後4年を経て、終戦前後を振り返って書かれたこの作品は石川達三の持ち味が出たかなりの力作だが、ほとんど言及されることがない。ごく簡単に触れたものとして、筆者の見た限り小田切[1975]、久保田[1978]、平野[1988]のほか、時評で少々取りあげられた程度である。作中には名前の出てこない芋井村なるモデルと作品を突き合わせた研究など無い。本稿ではそれを行なうことで、山村にとっての戦時体制の切迫感、あるいはその不在、更には疎開が山村に与えた影響を考えていきたい。疎開研究の精度が上がり細分化していく一方で、分かりにくくなっているそれぞれのつながりを考えるのに適しているからだ。

この作品では史料の少ない縁故疎開と工場疎開が詳しく描きこまれている。それ自体重要なのだが、この作品の特徴は、そうした諸々の疎開による戦時利得者の存在を浮き彫りにしている点である。従来の疎開研究でも農民と都市住民の接触という観点から疎開を捉え、受け入れ側である農村の優位が強調されてきた。だがこの作品では地域の顔役である旅館経営者が、闇取引で小金をため込む農民とは大きく異なるレベルで富を蓄積する様子が描かれている。それは特に縁故疎開と工場疎開によるところが大きい。従来の疎開研究の中では出てくることの少ないこうした存在に注目しながら、「暗い嘆きの谷」を読んでいこう。

II. 先行研究

そもそも疎開を描いた小説のまとまった研究というのは私の調べた限り、ゆり[1994]所収の「文学にあらわれた疎開」程度である。それも佐野美津男や大江健三郎など、疎开学童世代の作家に限定されている。当時少なくない数の作家（特に徴用されない高齢の作家など）が疎開しており、例えば正宗白鳥「罹災者の悲しみ」

（『新生』1946年1月号）や、故郷へ疎開した太幸治「冬の花火」（『展望』1946年6月号）など、知られている作品やその個別研究はあるが、それも含めて疎開という観点から系統立てた研究は見当たらない。いうなれば、ある作家に疎開体験が与えた意味を問う研究はあっても、作家（達）が疎開をどう意味づけたかの問いが、当事者世代に限定されたゆり[1994]以外には見当たらないのだ。系統だっているわけではないが、荒井他(編)[1988]には、「暗い嘆きの谷」の他、いくつかの疎開の作品が掲載されている。しかし疎開の利得者を描き、地域社会の変容をあぶりだしたものは無い。

疎開について大まかな整理をしつつ、歴史学を中心に疎開の先行研究を見ておく。疎開とは文字通りに解せば「空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること」（『広辞苑』第6版）である。十五年戦争期の疎開とは、基本的に建物疎開、工場疎開、人員疎開の三つである（その他に各種物資の疎開もある）。その目的は「防空都市建設」であり、反撃のための戦闘配置であるという観点から、避難ではなく歩兵の戦闘用語だった「疎開」という語が用いられたという（佐藤[1994: 3-5]）。木造建築中心で密集しすぎて火災に弱い日本の都市の密度を疎にすることが中心であり、法的措置（＝強制力を伴うもの）としては建物を取り壊して市街地に空地を作る建物疎開が最も早くから進められたのは当然であった。1944年の1月ごろから、建物疎開の第一次地区指定が内務省から出されているという（石原[2005]）。ただし山村を舞台にした「暗い嘆きの谷」では建物疎開の描写はない。長野県内の建物疎開に関しては、板垣[2008: 177-191]が詳しく言及している。

建物疎開がさしあたり空間（空地）を作ればよいのに対し、戦時体制を動かすための物資を作る工場を守るための工場疎開では、工場の移

転先を確保する必要があった。貧弱な輸送体制の中で設備を移すばかりでなく、工場を動かす管理者や熟練労働者などの移動と居住先も併せて必要だったわけである。重要産業、特に航空機産業の工場などから工場疎開を進めていったが、疎開先で壕を掘って作られた地下工場でもともな生産のできることはまれであった。

ちなみに、地方産業の興隆目的や軍需工場の分散のための地方への移転は、1935年前後からある程度進められている。こうした長期的な軍事生産拠点の地方分散を「工場移転」、空襲が間近に迫るか、実際に空襲を受けて行なわれる緊急の工場の移動を「工場疎開」とここでは呼んでおく。むろん両者の境はそれほどハッキリしているわけではない。工場疎開の実態は疎開の中でもわかっていない点が多いので今後の説明が待たれるが、「暗い嘆きの谷」に工場疎開の話が出てくることは重要である¹⁾。

人員疎開は人を都市から人口密度の低い地域へ移動させるものであり、学童疎開でお馴染みである。学童疎開は、「少国民」を空襲から守り（防空の足手まといを地方へ送り）、しっかりと教育を続けさせる（将来の戦争の担い手として育てる）ためにも行なわれる必要があった。学童疎開は一般に縁故疎開、集団疎開、残留学童と三つに分類される。残留者は疎開とは関係なさそうだが、後述の通り学童疎開の実態を考えるためには不可欠である。ちなみに作家の疎開の様な個人的な移動も少なからずあったわけで、それが一般的な人員疎開、普通縁故を頼っていた。本稿との関連で言えば、板垣[2008: 69-71]は、戦時における地方社会の不平等を考察する中で、縁故疎開がしばしば都市に残るより食糧事情が悪化したことを示している点で重要である。また、ほとんど知られていないが学童以外（地方に縁故のない妊産婦など）の集団疎開も存在したことが飯田[2002]によって指摘されているが、実態がほとんど分かっていない。

圧倒的に先行研究がぶ厚いのはやはり学童集団疎開である。証言の多さだけでなく、星田[1994]、逸見[1998]、全国疎开学童連絡協議会(編)『資料で語る学童疎開の記録』(1)~(5)など、行政資料や学校側に残された資料の掘り起こし、整理が一通り行なわれ、かなり全体像が見えてきたといえる。逆にいえばこれ以降の研究は地域史などでのかなり細かい話が中心になっている。配給、農村社会といった疎開を取り囲む状況に留意しながら、従来の疎開研究の視角の意味と限界を整理した黒川[2006]や、板垣[2008]のように地域における戦時体制の変化への目配りのある優れた研究などを除くと、重箱の隅をつつくものになりがちである。この二つの研究は、疎開と密接な関係にある配給の問題を大きく取り上げているが、これは戦時末期の社会変容を、モノとヒトの移動の両面から捉える試みといえる。こうした試みは、(当事者の語りを重視する立場であるとしても)当事者には見えなかった社会的背景へ切り込んでいくために必要であり、小説を扱う本稿にも参考となった。

以上が疎開研究の大まかな現状なのだが、全国疎开学童連絡協議会(編)[1991: 36]に拠れば、防空総本部の調査による1944年12月末現在の東京都35区(当時)の学童疎開の状況は、集団疎開34万7780人(34%)、縁故疎開32万2887人(31%)、残留学童32万7033人(32%)であった。調査主体によりバラつきがあり数字には諸説あるが、重要なのはこの時期、集団疎開、縁故疎開、残留組がほぼ三分されていることである。だが集団疎開の評判の悪さも手伝い、45年に入ると縁故疎開に切り替える人が増えていく。学校レベルで行われる集団疎開に対して、縁故疎開や残留者の記録・資料が残りにくいからである(ゆり[1994])。

東京都では対象学年の約三分の二が疎開に行ってしまったわけであるから、疎開という政策

は残留学童へも何らかの影響を与えたであろうことは想像に難くない。残留組が多くは健康上の理由（疎開生活に耐えられない）もしくは経済上の理由（毎月10円の食費負担が困難）から都市に残ったこともあり、一番危険な場所に残ったはずの彼らが「人並みに疎開さえ出来なかった」（宮原[1984: 91]）と一種の劣等感をもったのではないかという指摘もある。

縁故疎開や工場疎開など、史料が不在であるならばそこは歴史研究が手を出しようが無いのは当然として、様々な疎開がそれぞれにもった意味を文学などのテキストを通して考えることは可能である。記録ではなく小説（フィクション）を読み解く中で、長野の一山村に疎開がどんな影響を及ぼしたと石川が考えたのか、主要な登場人物の広田という戦時利得者が、疎開の諸側面を貫く存在として描かれているという点に注目しつつ見ていきたい。実態がまだまだ分からない縁故疎開や工場疎開を、学童疎開と（別の枠組みではなく）並列的に考察するための一つの試みと言える。

その際、疎開の中でもあまり知られていない側面に光を当てて論じる以上、独善的なテキスト解釈を避けるためにも、歴史研究を積極的に参照していく。以上、疎開についての基本的な事項と先行研究を抑えた上で、作品の舞台となった長野県芋井村という一農村が敗戦前後の日本においてどのように位置づけられるのかを確認しておきたい。

III. 長野県および芋井村の位置づけ

1945年8月13日月曜日、長野が空襲され、47名の犠牲者が確認されている。午前6時10分ごろの上田飛行場への攻撃を皮切りに、夕方まで5回にわたりグラマンの攻撃が繰り返された（長野空襲を語り継ぐ会（編）[1995]）。芋井村には爆弾は落ちずに済んだ。

翌日にはポツダム宣言が受諾される戦争最末

期、長野市周辺の人々は初めて空襲の恐怖を直接体験する。この事実から、この地域の人々の多くにとって、戦争における直接的暴力行使がかなり「遠い」世界のものであったと見えなくもない。むしろ、その一回で犠牲となった人がいる事実は「遠い」などという考えが幻想だったことを示している。またこれから見ていく通り、戦争の様々な影響はよくわかりすぎるくらいこの村にも押し寄せており、総動員体制はこの本州内陸の一山村にまで確実に及んでいたわけである。

信州長野。本州最奥の地として国体護持の最後の砦、天皇の移転先たる巨大地下壕が松代町ほかに建設された地⁽²⁾。芋井村にもいわゆる「松代大本営」関連施設が存在した。「暗い嘆きの谷」の作品中に何度もガソリンカー（軌道）のトンネルが出てくる。そのトンネルが「チ」号倉庫と呼ばれる松代地下壕関連施設の一つなのだ。石油不足の折、1944年1月に営業を休止し、1945年時点ではトンネルしか残っていない。この鉄道、長野駅の南側すぐの南長野駅から裾花口駅まで7.4kmの鉄道を営業していた善光寺白馬電鉄（通称「善白鉄道」）であった。

営業停止後2ヶ月ほどの間で諸設備は撤去され、レールや橋げたは払い下げられた。「買収されたレールはインドネシアのセレベス島で当時建設中の鉄道に輸送されたことになっているが、確かなことは定かではない」（駒沢[1998: 105]）という話も。大東亜共栄圏内での経済協力といえは聞こえはいいが、山間の7.4kmに過ぎない地元民の足を奪ってまでインドネシアに運ばねばならない当時の日本の鉄鋼、燃料事情と、それにかかる輸送等のコスト、44年ともなれば海上輸送のリスクも大きい。壮大なる非効率の社会構造の一端をイメージさせる。

このトンネルは作品内では弾薬庫とされているが、松代「チ」号倉庫として、天皇が松代に移転する際、天皇・皇后以外の皇族の移転先と

して整備が計画された場所なのである。実際のところ、トンネルを利用するにしても居住用の建造物を作る段階には至らず、45年7月26日に工事命令が出ているが工事は文字通り手付かずで終戦を迎えた。皇族用の移転地となる位であるから、相当に安全な地域と見られていたことが改めてわかる(日垣[1994])(青木[1992])。

「松代大本営」関連施設や皇族の移転は最高度の機密事項であったから、「暗い嘆きの谷」の中ではトンネルが皇族用のものだったとは書かれていない。つまりほとんどの住民も石川達三も知らなかったわけである。また、松代地下壕建設で酷使されたことが知られる強制連行された朝鮮人労働者も、作品内には描かれていない。工事が実質的に進まなかったため、芋井村には朝鮮人労働者は来なかったのだろう。しかし日垣[1994]が指摘しているが、そもそも善白鉄道の建設自体が朝鮮人労働者（この場合は、「自主的」渡航者）の存在とその搾取抜きにはありえないものであったことは確認しておきたい。「満州事変」の勃発直後、31年10月から約3ヶ月間、善白鉄道工事争議が起きている。建設(請負)会社の賃金未払いなどに対して闘争をくりひろげたのが朝鮮人労働者中心の全協(日本労働組合全国協議会)土木であった(長野県(編)[1990: 261])。

これから具体的に分析していく作品そのものには、セレベス島のルールも朝鮮人労働者も出ては来ない。だがこの作品の描いた時空間が大日本帝国のアジアへの侵略を含み込んだ場であったことは今日の視点として抑えておく必要がある。もっともそうしたものの不在は、作者石川の主体的な視点のとり方の問題以上に彼の知りえた当時の資料(や口コミ情報)の限界によるところが大きい。この「暗い嘆きの谷」は、その限界を抑えた上で読めば、長野の一山村というローカルな場の描写に徹しながら、終戦前後のそのローカルな場が外部とどのような位相

でつながっているかを示唆していると言える。

IV. 学童集団疎開

さて、ようやく石川達三「暗い嘆きの谷」に入る。この物語の舞台となるのが、長野市の中心から車で20分ほどの芋井村にある温泉郷とある旅館である。作品中には「裾花の温泉部落」と記述されているが、モデルは善光寺温泉郷である。ただし裾花という地名も同村内に存在し、そちらにも温泉郷があった。

旅館の主人、広田尚正は頭山満の門下を自称し、陸軍中将の長勇の知り合いだとも言う、国士風か政治ゴロとも呼びうる男である。芋井地区戦後五十年誌編集委員会(編)[1999]によると、広田には竹内廣正というモデルが実在し、その経歴は作中の広田とほとんど一致する。地元の裕福な百姓が地道に源泉を掘り当てたのを聞きつけた上田市出身(=よそ者)の広田。法律に暗い地元の人間をヨソに、顔の利く県庁に掘削工事の許可を得てやって来て、独占的に温泉を開発する。開業してからは長野の各官庁の役人を接待し、戦時統制が強まるにつれそのコネを活かして物資を集める。市街から近い割に人目につかない山奥であるため、物資不足に喘いでいる市民に隠れて宴会をやるのに丁度いいのだ。食料の多い農村でもぜいたく品である肉や酒を当時集められるのは顔役でなければ難しい。石川は作品の中心にこの竹内を据えることで、戦意高揚の叫ばれる中で疲弊していく疎開者集団に対して、宿主の立場や軍とのコネを使って私腹を肥やしていく存在を描き出し、戦時末期の一農村を通して大日本帝国の崩壊を象徴的に表現するという意図があったと言える。

そんな温泉旅館に東京都下谷区の疎开学童57人がやってくる。1944年の冬の初め、12月ごろである。派手な遊楽地から疎開地となっていく裾花温泉。「そうして明るい歓楽の谷間は、やがて暗い嘆きの谷間になって行った」(石川

[1978: 226-227])。

この温泉郷に実際に疎開してきたのは、足立区立梅島第一国民学校の生徒たちである。石川はそれを下谷区の学校に変えている。終戦後たかだか4年、モデルを特定させないための配慮もあっただろう。比較的貧しい層が多い共通点があり、東京大空襲の被害がより大きかった下谷区（現在の台東区の一部）の学校にすることで、後述するように劇的な効果を狙ったのかもしれない。また、梅島第一国民学校が第一次の疎開を完了したのは、東京都からの集団疎開がピークだった44年8月である。これを冬（おそらく12月）に変えたのは、暗いイメージの冬から疎開生活を始める設定にするとともに、終戦までの様々な出来事の密度（速度）をより高めて、「暗い嘆きの谷」の印象を強めるためだったのかもしれない。今となつてはその脚色がなくても十分狙いは達成できたのではないかと思うが、戦後数十年の間に作られていく疎開を語る型の様なものが全く存在しない中で石川なりに手探りでやっていた結果なのだろう。

前述の通り、作品内の学童たちは貧しい層の多い下谷区から来ている設定になっている（実際の下谷区の学童集団疎開は福島県へ向かった）。親はたいした仕送りができない。「衣料の補給はほとんど言うに足らず、食物に豆糟入りの砕け米や大豆入りの玄米を配給されている始末」。栄養状況の悪い中で正月を迎えることとなり、引率の三人の先生は学芸会を開くことにする。近所の人たちを招待するかわりに「児童の慰安のために餅を五切れずつ御持参願いたい」と。そして学芸会は成功したのだが、宿の主広田は教員の行動に憤ってこう家族に話す。「あいつ等は一体何だ。〔中略〕百姓共から五切れずつの餅を持って来させて、あの人数ならば一人当たり五切れは食わせられる筈じゃ。ところが、子供たちに聞いて見ろ、二切れ位しか食わされては居らん」（石川[1978: 227]）。つまり

子供をだしにしてせしめた餅のほとんどを、教師が自分の分として大量にくすね、東京の家族へと送ったのだ。ただし語り手はこうも付け加える。「宿の主人の批難はその通りであったけれども、宿の主人もまた学童配給の米塩に手をつけていた」（石川[1978: 228]）。結局は最も弱い立場の子供がしわ寄せを受ける。

ちなみにこのような学芸会といった形での交流会は広く行なわれていたようで、不足する食料を補うための一つの方策であると同時に、先生と地元の顔役との「顔つなぎ」の場として機能していたようである。数十～百数十名の生徒を連れ、大量の配給の管理の権限を握っている先生とつながりを作ることは、受け入れ側にもメリットがあったはずである。

また学芸会には、単純な「珍しいもの見たさ」や「都会のにおい」への好奇心から興味を示した大人もいたかもしれない。東京都の学校の集団疎開が決まった44年7月と、受け入れが始まった8月の『信濃毎日新聞』（以下、『信毎』と略記）を見ると、1日4面のみとなった紙面の中で疎開関係の記事が頻繁に見受けられる。受け入れ県が力を入れていたことが窺える。「疎開児童に通じて優れている点は国語の読みぶりや何ともいわれぬうま味がありまた図画習字音楽等も特に眼につく、中には先生も驚くような者も相当居る」。これは『信毎』1944年7月14日、軽井沢第一国民学校の校長、清水誠一の「疎開学童の現状（下）」という記事である。まだ集団疎開が始まる前、縁故疎開の生徒について書かれたものである。縁故疎開では地元の子と一緒に授業を受ける。別荘地軽井沢に縁故疎開で来るということは、別荘を所有している上流層の子どもが中心になる。清水も指摘しているように「その家庭が概して知識階級である」生徒たち中心なので、その「疎开学童の現状」には、明らかに階層的・文化的偏りがある。

清水はこの文の締めくくり近くで次の様に述

べる。「この地方の自然の生活こそ大東亜十億民族の指導者たる大国民の底力を培うものである。〔中略〕かくて今や疎開児童は国民としての底力を強力に影響され、土地の子供は国民としての洗練された境地に影響されて、この一大交響楽が全く自然の生活の中に□調にかつ力強く奏されつつあるのである」(□は判読不能箇所)。長野の自然の持つ底力と東京の洗練、都市と地方のステロタイプを利用しつつ協働でそれを乗り越えていくという論理を構成する。軽井沢に来る疎開者は「都市」住民イメージの典型としてもってこいである。集団疎開に先行する時点での縁故疎開において、こうしたイメージが説得力をもって語られる。そこにより雑多な層からなる集団疎開の学童がやってきたわけである。むろんそうしたイメージは崩れていく。

作品世界に戻ろう。1945年の2月。硫黄島での戦闘が始まっていた。石川本人がモデルとなっている新聞記者白石が、疎開先を探しに旅館にやってくる。この白石に限らず、東京への空襲が悪化する中で家族での疎開先を探しにやってくる人が増えてきている。親類を頼らず旅館に探しに来る以上、大抵はそれなりの支払を想定している「上客」である。子供たちの施設の使い方は荒っぽく、風呂場は風が落ち、一般の宿泊客から文句が出る。「多少の米や麦は学童配給から削り取ることは出来ても、実際に採算は合わなかった。〔中略〕学童をその宿舎から追い出し、無料で住んでいる先生たちを別荘から追い出せば、相当数の疎開家族を入れることが出来る」(石川[1978: 231])。広田はそういう腹づもりであった。

東京都(編)[1996]によれば、疎開児童には、一人当たり一ヶ月40円の経費がかかる計算となっている。維持費20円(うち国庫負担10円、都負担10円)と、食費20円(うち国庫負担10円、保護者負担10円)であった(あとで食費が多少

上がる)。学校側の費用が多く、寮(宿舎)に入るのは一部である。長野のケースではないが、品川区の学童集団疎開を受け入れた東京都南多摩郡恩方村(現八王子市)にある寺に残されていた契約書には、計58名の受け入れに対し1ヶ月約230円を自治体から支払うとある。一人当たり月4円ほどしかない(食費は別)。予算は同じなので他の受け入れ地域でも大差ないはずである。農業県長野でも、44年末ごろ、米1升0.5円の公定価格に対して闇値が3円(県平均)、以後闇値は上がる一方だった(長野県(編)[1990: 554])。芋井村は山村ではあるが、非農業従事者も多い長野市の隣であるから市内からの買出し客も少なくない。物価は全県平均より下ではないだろう。

広田の宿では善意によって、特別な料金等抜きで先生だけは別棟(別荘)に寝泊りしていた。こうした状況ではおそらく赤字を累積し続けるはずであり、余程の慈善家かつ財産家でなければ耐えられない。むろん貧乏な生徒が多い学校であれば「袖の下」も期待は出来ない。疎開のシステムがいかに善意に依存していたかが覗える。この状況に不満を持った広田は、教員の不祥事につけ込んで学童達を追い出していく。

裾花温泉にこの児童を引率してきたのは、既に触れたとおり3名。内一人は宗森とみ枝という独身の女性教員であった。若い男性が兵士になっていることが普通である以上、女性教員は多くなる。家族と離れる疎開への引率となれば、既婚者よりも独身の教師が選ばれやすく、実際に引率者に女性の独身教師は多かった。

作品中の若い女性教員宗森は、同僚の教員で妻子を東京に残す矢島の子供を妊娠してしまう。生徒の間ですら話題になっていたその二人の仲は、すぐ旅館や集落の人にも知られることとなる。他の問題も含め、弱みにつけ込む形で広田は学校側に宿からの退去を要求。替わりの場所が見つかり次第転居することとなった。実

際にあったとしてもこうした出来事は当事者間の語りでは証言できないであろう。以上の退去理由が石川の創作か事実に基づくのか不明だが、モデルとなった梅島第一の第一次疎開組は温泉宿を出て、寺に分宿した第二次疎開組に合流したことは確からしい(芋井地区戦後五十年誌編集委員会(編)[1999: 12])。

時恰も3月上旬であった。45年3月9日深夜から翌日にかけて、言わずと知れた東京大空襲を迎える。足立区というモデルを下谷区に石川が変えたのは、この有名な空襲の被害を受けた地域にすることで話を展開させやすくしたのだろう。退去を命じられたがまだ移転先が決まる前、東京で罹災した矢島先生の妻子が逃げ延びてくる。「東京の大空襲を眼のあたりに見た人から話を聞くのは、部落の人たちにとってこれが最初であったから、宿の主人は矢島夫人を帳場へ招き入れ、〔女将の〕君枝やその四人の子供たちや女中まで集まって彼女の話聞いた。夜空から降って来る焼夷弾のはなし、累々たる死体のはなし」(石川[1978: 232]〔〕内は引用者注)。

ラジオで「相当の被害あり」と伝えられてはいたが、報道統制のため詳しい話はなかなか入ってこない空襲の様子。それをこの山村の人々が詳しく知るには何より「口コミ」が重要な手段だったことが窺える。物資・人員の移動を厳しく統制していた当時の日本であるが、空襲で焼け出され、罹災証明が出れば配給の保障された移動ができた。身寄りを頼って長野へ入ってくる人も少なくなっただろう。東京の人間にとっては、焼け出されればその後の居場所があるか悩み、そうでなくともいつ自分の家が焼けるかも知れぬ恐怖で過ごした3月であった。しかし宿の人が矢島夫人の話を知ったのは、空襲の話もさることながら、夫人はまだ知らぬ夫の不倫が今後どうなるのかというゴシップの興味も大きな要素であった。所詮は村の人々にとって東京の空襲など他人事でしかな

い。破壊の現場からの距離感がよく出ている。

長野の、少なくとも広田の周辺の人々にとって、45年の3月とはどのような月であったのか。日本では3月といえば年度末であり、県庁、警察、税務署、軍などの宴会が増える。広田の旅館には書き入れ時である。役人や軍人が一升瓶や鶏を手に温泉郷へやってきて、転勤だ栄転だという話で盛り上がる。「東京が焼野ヶ原になろうと沖縄が占領されようと日本が滅亡の危機に瀕して居ろうと、役人や軍人は宴会をやらなくては済まないのであった」(石川[1978: 234])。

そうした機会に乗じて広田は統制物資を手に入れるためのコネを着実に大きくしていくのである。そのような世界が眼の前で展開されているのを眺める子どもたち。「疎開の学童は東京の家を焼かれて帰る術もなく、親の消息すらも知らない者があるというのに、この温泉宿を追われて行こうとしていた。栄養の悪い疲れた顔をした子供たちは、川岸の桜並木の土手にふところ手をして五人七人と並び、硝子戸越しに宴会場をながめ、料理の皿を持って廊下を往き來する女中の姿を見送っていた」(石川[1978: 234-235])。宴会に打ち興じる人々とそれを見つめる子供たちの対比は、権力者との距離による理不尽なまでの不平等を描き出している。そして宿主の打算で学童が追い出されていくのだが、「暗い嘆きの谷」の真骨頂はここから先、学童集団疎開以外の疎開を細かく描きこんでいるところにある。

V. 温泉郷への工場疎開

学校側が退去を要求され、この温泉郷からさらに30分ほど山奥にある寺院へと移るのが3月31日。それによってこの温泉宿の様子が変わる。変化の一つが空襲を避けてやってくる縁故疎開の人々であるが、それについては後ほど述べる。もう一つの変化、温泉郷にまで入り込んでくる工場疎開を見ておきたい。他に比べて実

態のよくわかっていない工場疎開のことが描かれているということ自体、非常に重要である。

この3月末ごろ、陸軍の将校が宿に来た際、彼を盛装で出迎えた広田は「この温泉場から多量に噴出するメタン瓦斯を軍に於いて工業上の用途に使うならば、資源活用の上から甚だ有意義」であることを説く。生徒たちの受け入れ先は決まったがまだ出て行く前から、彼らが寝泊りする大部屋の儲けを最大限にする使い道を算段していたのである。当時エネルギーの枯渇しかけていた日本がまさにワラにもすがる思いで温泉のメタンガスまで利用しようとしたわけである。そうして広田は以前から当たりをつけていた、「メタン瓦斯を使って注射薬のアンプルを造る」工場を営業する男性を呼び寄せた。しかし「広田は部屋の賃貸料や瓦斯の使用料を、前の話し合いの時より二倍ぐらい多く要求し」(石川[1978: 235])、結局物別れで話は終わった。

ここには工場疎開をめぐる興味深いエピソードが窺える。長野県は工場疎開の一大受け入れ先でもあった。諏訪湖周辺、昭和恐慌で打撃を受けた製糸工場の跡地に精密機械工場が移ったことは有名である。その早期の移転は資材も運搬手段も充分でそれなりの成果を上げるのだが、「疎開」という言葉が定着し出し、本格的な空襲が確実にようになってきた44年過ぎになると、生産性の低下を覚悟の上で工場疎開が行なわれる。しかも重要産業ほど疎開の対象となることから航空機産業の工場疎開が優先され、長野にも多く来た。米軍は44年以降の日本本土空襲に当たって航空機関連施設や航空機産業を最初の目標としたので、日本側も目の付け所は間違っていなかった。しかし空襲を前提とした防空の限界は明らかだった。運搬手段や新たな工場の受け入れ先、あるいは労働力の調達、もしくは移動に伴う宿泊先、繊細な技術の移転可能性。具体的な裏づけのない工場疎開の乱発はむしろ逆効果であり、「この疎開が航空機生産の上に

与えた損失は、爆撃の直接効果より遙かに大なるものがあつた」と、空襲の当事者たるアメリカ合衆国戦略爆撃調査団[1972: 107]から総括される有様だった。

航空機のような最優先産業の工場疎開の場合、相当の資金が投入され、大規模なものともなれば周辺住民の立ち退きを要求して行なわれる。これは長野への機能移転の集大成ともいえる「松代地下壕」と共通するような性格を持つ強制的なものである。終戦直後の書類焼却などもあり実態が分かっていないものも多いが、大規模なものであれば幾らか証言なども出やすいわけだ。だが作品中の温泉宿の一例の様なマイナーなケースは一層謎だらけである。分からない部分は多いが、概ね次のように説明できるだろう。

注射薬のアンプル(=医薬品)といえ、兵器ほどの緊急度はないが、本土決戦も意識した軍にとっては必要な物資である。よって航空機産業の様に軍命によって疎開を強行しはしないが、工場主が自主的に疎開先を見つけて移ってくれば、いつ空襲されるともわからぬ東京に工場があるよりもよいので移転の許可は下ろせる。

温泉宿の側としても儲けにならぬ学童を追い出すことは決めたが、大部屋を埋める団体の上客などを期待できる状況ではない。むしろ工場として貸し出してしまえば安定した儲けを得られる上に、将校に断じて見せたように軍への協力という名目で利得を正当化した上で、地域での自らの権威を強めることもできる。国士気取りの広田の思惑にピタッと当てはまったわけだが、彼の強欲が、移転先を見つけることが困難であろうと相手の足下を見たために失敗したのであった。むろんそれも軍の強制ではないからこそ万が一交渉が決裂してもやむを得ないという計算あつてのことだろう。

というのは広田は間もなく「次の手」を打っ

て別の移転話をまとめたからである。電気通信会社に勤めていた長男のコネで、その会社の下請け工場がメタンガスを燃料（動力）にして部品を作るという話である。その工場を経営する荒川さんが5月の初めにこの温泉にやってくる。「風呂場の隣にある娯楽室を改造して機械を据えつけ、疎開学童の居た広間を職工や女工の居室にするという計画であった」(石川[1978: 262])。今度は話がまとまり、設備の使用料やガスの利用代をあわせて毎月数千円の収入となるとのこと。手間がかかる上に数百円単位の収入しか得られない学童疎開より明らかに利幅が大きい。そして工場をつくる工事が始まる。

この温泉郷の工場疎開の話はしかしまだ続く。沖縄戦の組織的抵抗が終わりを告げる寸前の6月20日ごろ、広田は「長男がつとめて居た関係で川崎の電気通信機の会社に、温泉の本館一棟に玄関までつけて述べ二百二十坪の建物を現金十萬円で売り渡した」というのだ。この引用の直後の一段落に非常に興味深い記述がある。「長野県一体は軍が最後の拠点とたのむところであり、大本営もここに移る予定であるというので、会社としては軍の半ば強制的な要望にしたがったわけであった。広田は広田で、実際に工場が作られる日は来ないことを予定し、敗戦を予見しながらこの混乱の中でひともうけするつもりであった」(石川[1978: 269])。この本館は縁故疎開者のうち二家族が住んでいるのに加え、荒川さんの工場の工員が住む予定であったが、その元請の大資本が入ってくる。しかも軍の半強制措置に伴うのであれば住人は反対のしようがない。

一番興味深いのは「終戦を予見しながら」の部分である。これはあくまで語り手が広田の行動を解釈してみせたものである。情勢を全く知らぬまま日本が勝つと大言壮語を吐く広田が、そこまでの予見をしていたかどうかは怪しい。ただし実際に工事の始まる前に終戦を迎え、設

備を手許に残したままで即金で十萬円を受け取っていた広田がまさに「混乱の中でひともうけ」したのは確かである。居住者も追い出されずに住んだ。

工場疎開の多くは、一般的な話としてはさしたる成果を上げずに終わった。近代工業の工場を移転することに対するあまりに楽観的で杜撰な見込みがあったわけである。そもそも設備移転のための大量の建築資材と建設労働力がぎぎ込まれて初めて移転ができるわけで、軍需生産の増強と緊迫する食糧の増産という二つの至上命題が叫ばれている中でエネルギーが建設業に振り向けられることの非効率性は明白だった。しかし物や人が動くよりも容易に（しかもこの場合は先に）カネは動いたわけである。広田の様な人間が実際に多数いた可能性もあるだろう。

この「ひともうけ」の締めくくりとして、広田は縁故疎開者が多数住む別荘の方も軍に売り渡す契約をする。45年の8月上旬である。広田は疎開者に対して移転（立ち退き）要求を出す。行き場の無い弱者を躊躇なく犠牲にして、自分の得られる利益を最大化しようとする姿勢が窺える。しかし東京も焼け、最早ここ以外に住むべき場所を持たぬ住民たちはそれを「黙殺」する。疎開者は別荘を明け渡すことなく敗戦を迎えている（結局引き渡せなかったこの別荘の件に関しては、広田が軍から金を受け取ったのか記述は無い）。弱い立場であるがゆえ常に広田の言い分を聞かざるを得ない縁故疎開者であるからこそ、その弱みの根本である宿（＝それがなければ広田の言い分を聞く根拠が無い）に関しては開き直って抵抗できたのである。その縁故疎開の人々について見ていくことにしよう。

VI. 縁故疎開の人々と本土決戦体制

疎開の本格化と東京大空襲で、人口約170万人の長野県に10万から20万人ともいわれる人々が来たといわれる。一大農業県とはいえ、戦時

の人手不足で食糧生産にも余裕はない。しかも「政府にとって、人員疎開は都市に居住する必要のない者だけを地方へ退去させることを目的とした施策であり、都市に残って生産に寄与すべき人々に対しては、そのまま都市に残るよう要求していたのである」と飯田[2002: 107]は指摘している。つまり労働力としては当てにならない人間だから疎開の対象となるのが実態であった。しかし受け入れ側は彼等を労働力として期待することが多く、そのギャップから来る不平が『長野県史』所収の諸資料などにも散見される。

「暗い嘆きの谷」の中でも、学童達の退去が決まった頃から広田の宿にも縁故疎開の人々（実際のところは宿の客）が来始めるが、その人々を見渡すと正に戦時下の労働動員から排除された人々が集まっている。象徴的なのが宮中御歌所の坂本先生。70代の老人で、息子の嫁（実は先生の愛人）と三人の孫と一緒に別荘の中でも最上の建物、貴賓館に泊まる先生は、「県庁から差し回した知事専用の自動車に乗ってやって来た」（石川[1978: 236]）。芋井地区戦後五十年誌編集委員会（編）[1999]に依るとこの坂本先生のモデルは、『明治天皇御製集』の編纂者、千葉胤明^{たねあき}であった。

ほかに、四谷で薬局を開いていた朝倉さん一家の妻と娘二人、そして石川達三をモデルとした新聞記者の白石さんの妻と幼い子ども3人。広田の遠縁加藤一家。若い画家の佐野夫妻。三村夫人という中年女性。都会の若い女性が入ってくると、「近郊の山々の農夫たちは通りすがりに眼をみはって眺めた。派手な空色の洋服、焦茶色のオーヴァ、踵の高い靴、赤く塗った爪の色」（石川[1978: 239]）。「そうして裾花温泉の部落に東京の風俗が色彩を加え、疎開者部落としての体裁がそろって来た」（石川[1978: 246]）。

主に別荘に宿泊する疎開者は、本館に生徒たちがいたとしても来られたのだが、結局のとは

ろは東京大空襲で実際に家を失ったり、東京が本当に危ないと認識して初めて疎開に踏み切るケースが多かった。そうした疎開者が来て間もない4月上旬（おそらく4日）、「またしても帳場のラジオは空襲警報をつたえた。〔中略〕伊豆半島から山梨地区に向ったB二十九の数機は、そのまま真直に北進して南信濃を越え北信濃にむかっていると云った。その放送の言葉が終るか終らないうちに、山々にかこまれたこの暗い谷底に飛行機の爆音がきこえてきた」（石川[1978: 245]）。

ラジオから流れてくる情報がリアルタイムで地域につながってくる様子が表れている。当時の日本の運輸体制を鉄道とともに支えていた海運。米軍はそれを封鎖するために海上への機雷投下を計画的に実施した。日本海封鎖の一貫として新潟にかなりの機雷がこの時期B29から投下されたが、長野はその通り道であった。空襲から逃げて長野に疎開してきた多くの人々。都市に残るより遙かに安全ではあっても、B29の轟音におびえる点では同じであった。長野県下の空襲は1944年12月9日、上田市の小県蚕業学校付近が攻撃されたのが最初であったが、45年4月時点ではまだ空襲による死者はいなかった。

しかし疎開者にとって一番戦争の実感を覚えるのは、全く他人事ではない東京の空襲の情報であった。やはりここは現地住民との決定的な違いである。夫（父）や親類、友人などを東京に残し、しかも自分達の「タケノコ生活」の切札である家財の多くが残っている。連日の空襲でこの温泉への疎開者が残してきた家も次々と焼かれ、もしくは運搬途中で荷物が焼かれたりすることも多く、無事に届く人間には嫉みの視線が向けられる。「家を焼かれ家財を焼かれた人々にとっては、この温泉の疎開地がもはや疎開などというものではなくて、戦争の情勢が何とかならない限りはもうどうしても動くことの出来ないものになってきた」（石川[1978: 250]）。

タケノコ生活などと古い言葉を使ったが、家財道具などを切り売りして食いつなぐ生活はむろん終戦前からあったわけである。しかも居住地に生活基盤のない疎開者ともなればその危機感は大い。学童集団疎開は地域からの配慮もあるが、個々人の疎開ともなればそんなものはない。親類・縁故が当てにならなければ配給と各自で集める闇物資のみが頼りである。戦時の農村という強力な紐帯を持つコミュニティに対して「集団疎開は一応マスの状態で対外的な処理をするのに反して、縁故疎開者はどこまでも個人で重圧の中に身を浸さなければならなかったのである」(ゆり[1994: 22])。よく指摘される通り、人員疎開とは戦時下(末期)の都市生活者と農村生活者との「交流」であり、受け入れる側であると同時に自給力のある農村側が「上に立つ」生活という側面をもった。疎開者たちはコミュニティにとってのよそ者として互いに似た境遇にあっても、「元来は赤の他人であり、疎開生活が終わったら再び赤の他人になってしまうことを予定していた。〔中略〕従ってその付き合いは表面的でありお座なりなものに過ぎなかった」(石川[1978: 251-252])。嫌でも濃密な人間関係を常時保たなければならぬ学童集団疎開と異なり、縁故疎開の大人たちはあらかじめお互いに距離を取ることで摩擦を避けていたわけである。その結果ばらばらな「個人」としてコミュニティに向わざるを得ないわけであった。

戦争も終盤に差しかかると、外地からの食糧供給が減少するという問題はもちろんあったが、44年ごろまでは内地での米、麦、芋の生産量は特に減少していなかった。農家の自家消費分を除けばほぼ完全に管理された米から、痛みやすいため統制が実質上なく比較的自由に売買できる野菜(生鮮野菜)まで、農家の生産品目によって統制の度合いが異なる。統制の変化やヤミ価格などに合わせて農家の生産・売却パタ

ーンが変化したことが加瀬[1995]によって指摘されている。つまり流通に回る農産物には、生産者の思惑が少なからず影響していた。

物資供給の減少と同時に流通事情の悪化が都市部の食糧難を強め、統制の網からこぼれる生産者の思惑と絡み合う。そこに入り込む買出し(=ヤミ流通)は本来統制当局から見て望ましいものではなかった。生存を確保するための個人、あるいは大規模な需要を満たすため、軍需工場や軍もヤミ取引を行なった。それは統制への裏切りである。しかし43年ごろから終戦までの状況は、そうしたヤミ取引者が農山漁村から食糧を都会に持ち込まなければ消費地への流通が滞ってしまう程に悪化していく。特に貴重品となったガソリンを割り当てられ、トラックを持つ軍や軍需工場による「流通」の力は大きく、それ抜きには生産が成り立たぬ「闇の構造化」とまで言われる(赤澤[1989: 179])。事態がそこまで行ってしまったこの頃のことを考えれば、食糧生産地に消費者=人を少しでも集め、食糧統制を容易にするという側面も疎開にはあったと言える。もっとも疎開に行った人々がその分たたくさんの食事を口に出来たかどうかは地域によって差があるが。

頼みの綱のもう一方の配給に関しても色々と問題があった。広田の宿から配給所までは山を登って40分。都会の女性が毎日行くにはきつい作業である。その運搬を宿が買って出るが、しっかりと「運搬代」の中間搾取がある。それとは別に正式にお礼を払っているのだが、立場の弱い客側は文句を言えない。時には食料の仕込みを手伝わされることもある(お偉方の坂本先生一家は呼び出されない)。

おまけに、最初から自給自足生活が前提されていない大都市では、配給は主食の米(麦、豆)類だけでなく野菜にも及ぶが、農家の多い長野県下の町村の大部分では野菜の配給はなかった。農工協力中央会による疎開受け入れの調査

によれば、「大都市同様配給のあるものと漠然と考えていた疎開者たちはいずれも困惑している」ので、当然闇のマーケットが広がっていく。東京大空襲後の罹災者の流入で、県下の「所謂闇値段は大都市との差は殆どな」いとまで書かれている(長野県(編)[1991: 225-227])。

そうなると疎開者だけでなく、長野市周辺に元から少なからずいた非農業生活者も苦しくなる。44年末頃、上田市のあたりでは既に食料品の闇物価が公定価格の10倍前後になっていたようだ(長野市のデータは見当たらなかった)。45年半ばには疎開者が増加する一方で供給量が一層低下した。温泉宿で小麦粉を取引する作品中の一場面。「『どの位でゆずって下さる?』／すると爺さんは無情な顔をして、／『おらあ、金は要らねえ』／と言った。／『お金が要らないって、じゃあ、どうすればいいの』／『そう、な。何か着物でも貰うべかな』」(石川[1978: 247]、／は改行の意)。

いくらカネがあってもモノが買えず、物々交換の世界になりつつあった。もはや通貨が流通手段としての機能を半ば失いつつあったわけだ。カネが完全に流通しなくなったわけでもないし、買出しの人が少ない山奥に行くほど交換のレートも低くて済んだようだが、物々交換の世界になればなるほど生活のための衣食住の現物を握る人間が強い。住を握る広田が強いのは見てきた通りであり、食を握る農民も強い。衣は軍需工場以外での生産はごく僅かになっており以前からの手持ち量がモノをいったので、現地の非農業民を含めた俸給者階層の頼みの綱はそこしかなかった。それは戦時下の農村において、衣服が都市以上に不足していたことも背景にある(板垣[2008: 1-3])。だとすれば、それが焼けてしまった場合の彼らの立場は非常に弱いものだった。「彼等は争うて都会地から農村へ流れこみ、農家に殺到して米を求めようとした。農民は日々に悪辣になり貪欲になり、値段を釣

り上げて都会人から財物を搾り取った」(石川[1978: 260-261])。ただこの記述には、都市生活者石川の農民への敵意が感じられる。下層の農民は食料以外の何ものも持たず、闇取引で生まれて初めて自給品ではない消費財をまともに手にしたというような場合もあったからだ。

直接的な形で民衆の関心(欲望)をつかむはずの貨幣すら当てにならなくなった状況において、もはや現地の人々は「日本の勝利よりも財産の安全よりも、ただ生きて行けさえすればよかった。〔中略〕政府をも軍部をも頼ろうとしない一種の虚無的な気持ちで、ひたすらに今日の安全をたのしんでいるのであった」(石川[1978: 268])と、文字通り即物的な生命維持のレベルに関心を集中させている状況であった。少なくとも石川達三の目には、終戦前にこのようなエゴイズム丸出しのアナーキーな空間が映っていたといえよう。一方で、経済が縮小再生産されていくにも拘らず裕福になっていく存在として広田がいる。生存のための物資には事欠かない広田は、農民達とは異なりカネをしっかりとため込み地域における自らの優越的な地位を安泰にしていくのである。配給品の購入ほか、軍、官との取引にはカネは不可欠だったからである。結局は真の無秩序ではなく、戦時体制の枠を破らぬ範囲での虚無とエゴイズムの浸透といえる。

7月以降、事態の急変を嗅ぎ取り、新聞記者白石は頻繁に妻子のいる長野を訪れる。軍人たちはこの時期に至っても温泉宿に来ては宴会に打ち興じる。「そういう軍人達の乱れた姿を、疎開の夫人たちは心細い気持ちで眺めていた。次第に彼女たちは日本への期待を失っていた」(石川[1978: 270])。戦意の喪失が窺える。

8月7日に再び来た白石。「来て見るとこの温泉部落では、広島が攻撃を受けたということさえも碌に知ってはいなかった。まして原子爆弾が何であるかも知りはしない」(石川[1978: 275])

と語り手は述べる。ただし『信毎』を見ても新型爆弾のことが記載されているのは8月8日であるから、これはやむを得まい。新聞記者の様な報道関係者が得る情報と、発表される情報との内容的・時間的ギャップを知ることのできるエピソードである。このギャップに対して作者石川は憤っており、それは半ば「無知なる民衆」に向けられているようではあるが、実のところ「愚民観」から国民に実情を知らせずに、結果みずからも冷静な現実認識を不可能としてしまった権力に対する、「生きてゐる兵隊」以来一貫した怒りだった。

そうした中で敗戦を迎えたこの温泉郷。一般的な8・15イメージに近いシーンも出てくるが、あまり今日では出てこない終戦イメージを作品から見て、本稿の結びへと進んでいこう。「その翌十六日から、裾花温泉には異様な風景が見られた。午後はやいうちに三台の軍用自動車が見え、釣橋のむこうに止まったと思うと、三人の兵隊が酒とビールと缶詰とを宿の玄関にはこびこんだ。更に豚肉の大きな塊をかついで橋をわたって来た。それから十七、八人の軍人たちの大宴会が夜更けまでつづいた。〔中略〕次の日は県庁の大宴会であった。県の役人達も明日はどうなるかわからない身の上である。〔中略〕それはまるで戦いが大勝利をもって終わったような景気のよい宴会であった」(石川[1978: 280])。様々な宴会が20日まで続いたという。自暴自棄ゆえとはいえ、「大勝利」を思わせる宴会とはいかにも軽薄である。住民＝一般国民たちの冷ややかな視線を無視した振舞い。それを眼にする人たちに終戦前から醸成されていた軍人達への不信感は決定的なものとなり、軍の権威が地に落ち、様々な軍需物資が略奪される。当然広田も、軍が工事にこの村に運び込んだ大量の物資をためこんだ。大量であるがゆえに人夫を雇って運んでおり、戦時中に金をため込んだ強みを早速利用したのだ(石川[1978: 281])。

9月、10月と次第に敗戦の精神的ショックから人々が立ち直っていく。漠然とした希望を持って多くの人が混乱の真っ只中の東京へ帰っていく。しかし戦時下の「都市に居住する必要のない者」の象徴だった坂本先生は、宮中御歌所の廃止で「その職を失い、その名誉をうしない、戦災に家も家財もことごとく失いつくして、今ではこの温泉部落に仮寓する貧しい一人の隠居にすぎなかった」(石川[1978: 286])。最後までこの地に残った疎開者として石川はこの老人をラストシーンに配置する。馬鹿騒ぎした軍人達とは対照的に淡々と振舞い続ける老人の記述が却って、個人の意思を超えたとどめようのない旧権威の没落を印象的に表しているといえる。

VII. まとめ

「暗い嘆きの谷」において、石川は都市(＝疎開者)と農村(＝農民)の対立という図式に乗って、自分自身(の家族)がそうである疎開者の目線から現地の人々を冷ややかに描いているともいえる。しかし作品に盛り込まれた具体的なエピソードはそうした図式を裏切る多様な相を見せてくれる。そして様々なエピソードを東京の様子や戦局とあわせて配置することで、疎開地をとりまく社会空間を私たちに見せてくれる。

たとえば学童集団疎開。集団である生徒たちを石川は個性的な存在としては書き分けない。同時期の小説での子ども描写と比較すれば、子供の主体性を捉えないという意味で太宰治「美男子と煙草」(『日本小説』1948年3月)と共通している。どうにも救いようのない現状と、そこでの感覚を描くという点で志賀直哉「灰色の月」(『世界』1946年1月)と共通するリアリズムとも言える。彼らは子供たちを焼け跡の「解放」といった空間と結び付けはしない。しかしながら太宰や志賀と異なり、子どもたちがどのような空間の中で絶望的な状況へ追い込ま

れていったのか、そのカラクリを石川は描き出している点は重要である。ほとんど加害者という意識すらない大人たちの都合、行為に振り回されるのである。

ここには当事者たる（元）こどもの視点の語り（＝戦後の疎開の語りの中心）の中で告発されてきた、加害者としての子ども、例えば上級生による下級生のいじめといったものはない（もうひとつのいじめ、地元の子による都会っ子へのいじめに関しては本稿では扱えなかったが、縁故疎開の子どもについての部分で描写されている）。だが、そうした語りの中ではよく見えてこない、宿と教員側のやり取りや東京と長野の距離感、戦況の変化に地域がどう振り回されるのかといったことが描き出されているのだ。それがこの作品の強みになっている。

軍人たちの狂乱、工場疎開、闇の氾濫。疎開者の流入によるコミュニティの変化。弱者がしわ寄せを受け、その裏で利益を得る一部の顔役。学童を追い出し利益の多い縁故疎開者を呼び入れ、工場疎開でさらに儲ける広田が、この地域における疎開の諸相を貫く存在として位置づけられていることを見てきた。十五年戦争の歴史化の進行は一方で、例えば疎開の客観化による専門的な諸研究を生み出すが、細分化されたものの相互のつながりが見えにくくなりがちである。専門的な研究をふまえつつ、時空間の広がり描きこまれた小説のテクストを読むことが、当時の状況に切り込む新たな視座を投げかけてくれることの一例を示せたとするならば、本論は一応の成功ということになろう。

註

1. 工場疎開を扱った数少ない研究に、東京都多摩地域での工場疎開を調べた齋藤[1998]がある。
2. 天皇の移転先という言葉を敢えて書いたが、「松代大本営」という広く流布している呼び方が含む諸問題が日垣[1994: 19]によって指摘されている。要は「松代」以外の地域の施設と、宮城（現皇居）など「大本営」以上の機能が捨象されてしまうことの問題である。

文献

- 赤澤史朗(1989)「太平洋戦争下の社会」藤原彰・今井清一(編)『十五年戦争史3：太平洋戦争』青木書店: 153-192。
アメリカ合衆国戦略爆撃調査団(1972)『日本戦争経済の崩壊』日本評論社。
青木孝寿(1992)『松代大本営 歴史の証言』新日本出版社。
荒井武美(他編)(1988)『長野県文学全集 第1期(小説編) 第7巻』郷土出版社。
逸見勝亮(1998)『学童集団疎開史』大月書店。
日垣隆(1994)『「松代大本営」の真実』講談社現代新書。
平野勝重(1988)「解説」荒井武美(他編)『長野県文学全集 第1期(小説編) 第7巻』郷土出版社: 471-495。
星田言(1994)『学童集団疎開の研究』近代文藝社。
家永三郎責任編集(1993)『日本平和論大系9 桐生悠々』日本図書センター。
飯田美季子(2002)「学童集団疎開が人員疎開政策中に占めた位置と役割」『立命館平和研究』第3号: 73-89。
芋井地区戦後五十年誌編集委員会(編)(1999)『芋井地区戦後五十年誌』芋井地区連合区長会。
石原佳子(2005)「大阪の建物疎開 一展開と地区指定」『戦争と平和 大阪国際平和研究所紀要』vol.14: 25-50。
石川達三(1957)『石川達三作品集 第十二巻』新潮社。

- 石川達三(1978)『石川達三作品集 第二十四巻』新潮社.
- 板垣邦子(2008)『日米決戦下の格差と平等：銃後信州の食料・疎開』吉川弘文館.
- 加瀬和俊(1995)「太平洋戦争期食糧統制政策の一側面」原朗(編)『日本の戦時経済 計画と市場』東京大学出版会: 283-313.
- 駒沢秀行(1998)「善光寺白馬電鉄」『写真探訪 信州の廃線紀行』郷土出版社: 94-107.
- 久保田正文(1978)「解題」『石川達三作品集 第二十四巻』新潮社: 683-688.
- 黒川みどり(2006)「地域・疎開・配給 ——〈都市と農村〉再考」『日常生活の中の総力戦 岩波講座アジア太平洋戦争6』岩波書店: 31-60.
- 松本和也(2002)「石川達三「蒼氓」の射程——“題材”の1930年代一面——」『立教大学日本文学』(89): 140-153.
- 宮原昭夫(1984)「父母のもとを離れて」『写真記録 昭和の歴史③ 太平洋戦争と進駐軍』小学館: 90-91.
- 長野県(編)(1990)『長野県史 通史編 第九巻近代三』長野県史刊行会.
- 長野県(編)(1991)『長野県史 近代資料編 第五巻(一)』長野県史刊行会.
- 長野空襲を語り継ぐ会(編)(1995)『長野が空襲された 改訂版』長野空襲を語り継ぐ会.
- 小田切進(1975)「解説」石川達三『暗い嘆きの谷』角川書店: 265-268.
- 齋藤勉(1998)「多摩の軍需工場の疎開」『多摩のあゆみ』vol.91: 56-69.
- 佐藤秀夫(1994)「総論 学童疎開」全国疎開学童連絡協議会(編)『学童疎開の記録1：学童疎開の研究』大空社: 3-24.
- 東京都(編)(1996)『資料東京都の学童疎開』東京都.
- ゆりはじめ(1994)『疎開の思想』マルジュ社.
- 全国疎開学童連絡協議会(編)(1991)『第二回学童疎開展：45年前の子供たち——学童疎開って知っている？——』全国疎開学童連絡協議会.
- 全国疎開学童連絡協議会企画事業部(編)(2007)『今、語り継ぐ学童疎開：戦時下の子どもたちに何が起きていたのか』全国疎開学童連絡協議会.